

完了報告書兼事後評価報告書

1. 基本情報

(1)事業名 コミュニティ創出と健康支援の継続的な仕組みの構築

(2)団体概要

①2019年の台風19号における水害被災地に、コミュニティサロン<てこてこサロン>を設置しお茶会等を平日毎日運営。幅広い年齢層の住民に合わせたイベントやサークル活動等も定期的に行っている。水害に加えコロナ禍も合わさり先の見えぬ不安を抱えて日々を過ごす地域住民の唯一の心のより所となっている。サロンに来る事が困難な方には個別支援も行っている。

②市内の復興公営住宅、計5団地に月2回程度訪問し、各団地5人程度を対象に太鼓・体操・歌・お茶会を組み合わせた<健康太鼓教室>を開催している。
健康増進と共に、交流の機会が希薄な独居の高齢者の唯一の楽しみになるなど、生きがいやコミュニティ創出の機会を提供している。

③復興公営住宅の県営住宅下神白団地に3年前から月1回程度訪問。住民一人一人（毎回5名程度）よりお聞きした思い出と共に馴染み深い音楽を収録したCDを年に2回程度作成し、個別訪問にて配布している。

普段団地の集まりに出ない独居の方に焦点をあて、CDという形で団地住民へその方の存在を広める事で、見守る目を増やし住民同士で支え合う関係構築にも寄与している。

(3)実行団体名 一般社団法人Teco

(4)設立年月日 2019年5月15日

(5)新型コロナウイルス対応緊急支援助成（通常枠での追加助成）の有無 無

(6)提出日 2021年9月29日

2. 事業概要

(1) 実施時期 2020年2月～2021年8月

(2) 対象地域 福島県いわき市平窪地区

(3) 事業対象者

- 直接的対象者グループ コミュニティスペース利用者、復興公営住宅入居者
健康支援イベント参加者等
- 間接的対象者グループ 平窪地区住民、復興公営住宅入居者

(4) 総事業費(うち評価関連経費)

13,478,510円（うち評価関連経費673,049円）

(5) 社会課題

福島県いわき市では夏井川等の氾濫により約1,200haが浸水し、約6,000世帯が罹災するなど甚大な被害が発生した。特に被害の大きい住宅地の平窪地区では在宅避難が継続しており、被災者の孤立によるコミュニティの喪失や、精神的・肉体的ストレス等による心身の健康被害などの課題が発生しており、対応は急務である。

(6) 事業実施の目的

いわき市平窪地区において、ここに住まう人々が不安や孤立を抱えていた時期を乗り越えて、発災前の生活のように心身共に健康で、再起に向けたエンパワーメントが引き出され、地域とのつながりや生きがいを感じられる生活が送れるコミュニティが創出できている

(7) 短期アウトカムの総括

いわき市平窪地区の中心地にコミュニティスペース「てこてこ」を設置し、被災者の精神的・肉体的ストレスを改善するために毎日のサロン活動や、対象者に合わせたイベントを定期的に開催した。

また、当初、コミュニティスペース利用者数（利用登録を行った人数）の目標を100名としていたが、最終的に189名が利用登録を行い、多くの方を支援することができた。

（8）具体的な活動の内容と写真

【 てこてこサロンでの活動 】

・毎日のサロン活動の様子

サロン活動を始めた2019年2月より平日毎日(9時～16時)オープン。

小さな子どもから高齢者まで老若男女が気軽に集う居場所を創出した。



・サロンをイルミネーションで飾る

水害から2度目の冬を迎えるが、一見元通りの生活に見えても被災した人々は不安や苦労を抱えている。せめて真っ暗な冬の夜を明るく灯すことができたらと、使用しなくなったイルミネーションを新聞記事等で募って、集まった電飾でサロンを飾り毎晩ライトアップした。



【 各種イベント等の一部 】

・炊き出しイベント(令和2年2月22日)

ピースポート災害支援センター・パルシステム・パレスチナ子どものキャンペーン等と協力をし、炊き出しイベントを開催した。シンガーソングライターの小出恵介氏も来てくださいり、在宅避難等をおくる被災者住民に身体も心も温まる機会を提供した。



・オンラインママカフェ(令和2年6月24日)

水害により公民館での親子サロンが解散し、コロナ禍にて4月～6月末まではサロン活動を縮小していたことから、子育て世代の方は孤立しがちであった。そのことから、オンラインママカフェを企画し、共通の趣味であるレジン作成をしながら語り合う機会を創出した。自宅に居ながらも想いを共有することができ孤独感の緩和に繋がった。



・ 夏祭り(令和2年8月19日)

水害により友達が転校したり、生活が一変したりと子ども達が受けたストレスは計り知れない。せめて夏休みに楽しい思い出を作ってもらえたると、サロン内外を屋台風に飾り付けして夏祭りを開催した。皆大喜びで、夏休みの宿題の絵日記に思い出を描いてくれた子もいた。



・ フラワーアレンジメント(令和2年12月16日)

サロンに訪れることが日課になっている年配の寡黙な男性がだんだん打ち解けて行き、若いころのお話を伺うとお花屋さんで働いており、資格も持っていることが判明。丁度12月ということもあり、その住民さんに講師になっていただきクリスマス風のフラワーアレンジメントづくりを開催。

参加者は皆お花に夢中で、「久しぶりに何かに熱中する時間が持てて楽しかった」「自宅に飾つたらとても華やかな空間になって嬉しい」という声を多く頂いた。



・ 薬膳お茶会(令和3年1月20日)

心も身体も健康になる時間を過ごして貰えたらと、薬膳茶を飲みながら自分で指をマッサージする〈指ヨガ〉を行う薬膳お茶会を実施。気分や体調に合わせたお茶の選び方や、症状の

緩和に繋がる指ヨガは住民の皆さんに大人気で、毎月の恒例イベントとなり数多く開催した。



・子ども春祭り(令和3年3月31日)

子ども達に屋外でのびのびリフレッシュしてもらいながら春休みの思い出を作れたらと、市内のダンスクラブのDance studio Gardenに依頼して、様々なパフォーマンスを披露していただいた。



・てこてこマルシェ(令和3年4月23日)

様々な方々からサロンに集まってきた大量の衣類を、被災地の住民さんに配布できたらとサロンの外でマルシェを開催しました。多くの住民は水害で衣類も水没してしまった為、最小限の衣類しか揃えていないこともあります。みんなとても喜ばれていた。

また、市内の農家さんの「白石ファーム」や魚屋さんの「はますい」さん等も駆けつけて下さい、活気が溢れるマルシェとなつた。



・てこてこ防災講話(令和3年6月11日)

水害から2度目の台風シーズンを前に、防災意識の向上をはかる為に消防士の方をお招きして防災講話を開催しました。普段サロンに中々来ない住民さんや、地元区から役員の方も参加していただきとても有意義で貴重な時間となつた。

また、事前にポスティング等で周知をした上で、講話の後に企業さんから頂いた備蓄水や非常食も配布したこと、必要な方に必要な支援を届けることができた。



・一閑張り交流会(令和3年7月14日)

ご婦人向けの手仕事の交流会をしていく中で、要望が大きかった一閑張り交流会も開催しました。始まる前は「もう手先が動かないから、、」と言っていた80代のご婦人の方も、交流会が始まると夢中になって作業をしておられました。出来上がりも大変満足していただき、「まさか自分でこんな素敵なお籠ができるなんて思わなかつた！」「お友達に自慢するわ！」と大変喜ばれていた。



【団体連携等の様子】

・情報共有会議の実施

令和元年東日本台風の被災地や被災者の現状を共有し、円滑なサポート体制がとれるよう、社会福祉協議会やいわき市、市内のNPO等が参加する会議に月に1度参加した。現地で継続した支援を行うのは当法人のみだったので、常にサロン等に集まつた住民の声を参加者に共有し続けている。



・災害支援ネットワーク「WAKI」設立

災害支援の為にも平時から繋がり合える組織が必要と2021年2月23日に設立。現在11団体が参加し、月に1度情報共有を行っている。



設立総会に参加した災害支援ネットのメンバー

福島県いわき市で活動している民間の災害支援
ボランティア団体などが23日、連携組織を設立
した。東日本大震災や2019年の台風19号の
経験を踏まえ、平時から各団体の連携を強め、災
害時の円滑な支援活動の展開を目指す。

(9)事業管理体制に関する振り返り

代表理事のもと、事務局長、2名のスタッフにより運営体制を構築。経理、サロンスタッフなどの役割分担を行った。

資金管理にあたっては、資金移動と月次締めの際にダブルチェックし、最終的に代表理事が確認印を押すなどといった何重ものチェック体制を取った。

リスク管理にあたっては、コロナ禍で事業を遂行していく中で、いわき市が示すガイドラインにしたがった上で、検温・換気・消毒等の基本的な感染症対策を徹底して実施しながら交流の機会を設けていった。

3. 事後評価の結果

(1)事後評価の実施体制

- ・ 実行団体スタッフ
- ・ 一般社団法人RCF

(2)「課題の分析」に関する振り返りと学び

①特定された課題の妥当性

「被災者の抱える孤立感や肉体的・精神的ストレス等の状況について適切に把握できているか」

・ 被災者支援を行う民間のボランティア団体へのヒアリングや、被災者への直接ヒアリングを行い、被災者の状況として「住宅に大きな被害を受けたが、誰に相談していいか分からな

い」「地域のつながりが移転などで切れてしまい、孤独感を感じる」「キッチンもお風呂も使えず長期間2階で暮らしており疲労がたまっている」などの状況を確認し、被災者の抱える肉体的・精神的ストレスの状況を把握した。

- ・被災直後であるため定性的な状況把握ではあるが、複数の関係者からの情報を重ね合わせ、きめ細やかな被災者支援が必要な状態であることを把握した。

②特定された事業対象の妥当性

「いわき市内の被害状況と被災者の数的情報を把握できているか」

「支援対象者を特定し、その課題の分析ができているか」

・被害規模は全国の中でも福島県、さらにいわき市が相対的に大きいことを定量的に把握した。支援対象地域の設定として十分妥当性があると考えられる。

・また、いわき市の復旧活動に携わったピースボート災害支援センターからいわき市の被害状況の評価をヒアリングし、他地域に比べ行政や社協によるローラー確認等がないことから被災者ニーズが十分に把握されておらず、住民が自ら対応せざるを得ない状況であることが確認されており、支援の必要性が高いことが確認された。

・活動をしていく中で、当初の課題をより実感したり、明確になったりすることはあったが、身体とこころの健康や孤立防止の為に、地域のつながりが必須であるという当初の計画は、事業を行う上で、もっとも中心的な課題だった。

・いわき市内において、平窪地区が最も大規模な被害を受けており、その地域に拠点を構え活動できたことはよかったです。また、水害に見舞われた平窪地区外の地域からサロンを訪れた被災者も多くいた。（小川、好間、内郷など車で20分以内の距離）

(3)「事業設計の分析」に関する振り返りと学び

③事業設計の妥当性

「課題解決や目指すアウトカムの実現に対し、必要な事業を設計できているか」

・当団体が目指すアウトカムの実現のため、必要な事業を洗い出し、各目的に沿った取組となるようロジックモデルに基づいて事業設計を行った。

④事業計画の妥当性

「事業設計に基づき、実行可能性や今後の事業継続等も見据えた具体的な計画を策定できているか」

- すでに地域で活動を開始していた下平窪支援ベースのサロン活動を引き継ぎ、ピースボート災害支援センターの協力も得てコミュニティスペースを設置、そこを拠点として被災者の心身の健康支援の取組等を行うなど、実行可能性の高い事業計画とすることに努めた。
- ロジックモデルを制作した際に定めた事業の柱は、現段階でも妥当と考えられる。月に2回の定例打合せではそれらの事業の5つの柱を確認することでリマインド効果を得ることができ、事業を行う上でも常にアウトカムを意識して行うことができた。

(4) 「実施状況の分析」に関する振り返りと学び

(4)-1 各アウトプットの達成状況

1) コミュニティスペースを開設・運営

- 2020年2月より、平窪地区に1箇所交流の拠点「てこてこ」を開設・運営。平日毎日(9時～16時)開放し、いつでも誰でも気軽に交流ができる機会を提供した。事業期間を通じて延べ395日運営、利用者数は延べ5,349人となった(別紙のとおり)。
- サロンオープン当初は毎日約50人が参加。コロナ禍で2020年4月より約3ヶ月サロン活動を縮小していた時期もあったが、その後は毎日10～15人程度の参加者が来るなどし、息の長い支援をすることができた。
- 例えば、回収期間が終了した後の土嚢袋に入れた土砂はどうしたら良いのかなど、誰に聞いたら良いか分からぬことや、行政に聞いても解決できなかつたことなどを、サロンに聞きにきててくれて情報を伝えすることが出来た。
- 公民館の修繕やコロナ禍の活動停止により、健康体操サークルや親子サークル等の集う場所や機会を失ってしまっている人々の唯一の集まる場所として心の支えになることが出来た。
- 事業期間を終え、再度振り返ってみても、本当にサロンは必要だったと実感する。計り知れぬ孤独や先の見えない不安を抱える日々の中で、気軽に誰でも来れる場所があることが、

話を聞いてもらえる人がいるということが、こんなにも心の支えになるとは想像以上であった。被災直後は特に炊き出しが必要だから、物資が欲しいからと訪れる住民ももちろん多くいたが、時間の経過とともに外部支援が手薄になる中で、本来の日常に戻るまでに長期的な心の支援は必須である。サロンを続けて行く中で生まれる人間関係や、コミュニティ、住民通しのつながりが心強さになり「こころの復興」に繋がった。

これは、これほど真剣に本気で被災者に寄り添ったサロン活動を継続して行わなければ分からなかつたであろう。

心身共に弱り切っていた高齢者が生きがいを取り戻した姿や、住民が日々に「来て良かった」「ここがあってよかった」と言ってくれたことは、本当に嬉しい出来事であった。

2)復興公営住宅でのイベント実施、チラシ配布、個別訪問で避難者を支援

- ・ 当初、復興公営住宅に避難している水害被災者に対し、復興公営住宅の自治会と連携したイベントなどによるコミュニティづくりや個別訪問等を計画していたが、コロナ禍で直接復興公営住宅でのイベント開催等は見合わせざるを得なかつた。
- ・ このような中でも、6箇所程度の復興公営住宅の自治会長等と連絡を取り合い、情報共有をはかたり、計6回「てくてこ新聞」を作成しポスティングや掲示板に掲示するなどして、復興公営住宅等に避難している方たちにも水害被災者の為にサロン活動を中心とした私達の活動情報がしっかりと行き渡るような体制を築いてきた。
- ・ 宮沢団地では、日頃から情報共有していた復興公営住宅の自治会長さんが、水害被災地の被災者の方を集会所の交流会に参加するようにお声掛けしてくださいり、実際にその方が参加して顔の見える関係性を作ることができた。
- ・ コロナ禍により集会所の催しなどが一切中止となつたことで、計画通りに訪れることが難しかつた。その中でも交流を図れている自治会では情報交換やイベントをお知らせし、サロンに3名程度の繋ぐことができた。

今回復興公営住宅という避難先が分かっている中でも日々、直接連絡をとることや状況を把握することが難しかつたことから、水害被災地から転居した方への継続した支援は想像以上に難しい。

水害直後は社協等からの電話連絡等はあつたようだが、行政支援が終わつたあと、それらの人へのサポートは難しい。しかし、水害後、小学校で2クラスが半減する程に人口流出があ

つたことからも様々なストレスが多くの人々にかかっていると予測される為、様々な角度からの支援が必要である。

3) 炊き出し、子ども向けイベントなど各種イベント等を実施

- ・ 月に2回程度、心身の健康支援と交流の機会を提供すべく、対象者に合わせた交流会や季節のイベント等を開催した。延べ37回開催、延べ863人が参加した（別紙のとおり）。
- ・ また、参加者からの要望で、ママ達による主体のママサークルが発足したり（週に1度、レジン作りやダンスレッスンを行う）、高齢者が主体の体操教室（月に2回開催）が誕生したりもした。
- ・ サロン活動開始当初から、「てこてこ」にいる間は不安を忘れて楽しい時間を過ごして欲しいと考え、話を聞くことを徹底して行った。また多くの方々が在宅避難をしており栄養の偏りからの健康被害も懸念させたことより、バランスの摂れた炊き出しも多く行った。
そんな寄り添う活動を積極的に行つたことで、その後ずっと交流が途切れることなく続いている。
- ・ 在宅避難中の親子のストレスを緩和するために、親子の触れ合いビクスや夏祭りなど子ども向けのイベントも多く行った。
- ・ 多種多様な交流会を開催したことが、被災者の満足度にも繋がった。水害で一度は絶望に追い込まれた中で、集まれる場があることで元気を取り戻していき、更に今までやったことのない初めての体験ができるという機会は、被災者の楽しみや喜びとなっていた。
その結果、参加者は増え続け、クチコミも広まり常に新しい参加者もいる状態であった。年齢や体力の限界を自ら決めてしまっている高齢者に対しても、導入の時だけキッカケを作るだけで、すぐに昔の感覚や気持ちを取り戻しても生き生きと活動する姿を多く見ることができた。それらの成功体験が「自分でまだまだできる」と思うことにつながり、未来を前向きに生きて行く原動力となった。

4) 復興連携会議や地域の見守り体制など連携に関する会議を開催

〈地域連携〉

- ・ 口口ナ禍の為、地元区の一切の催しが中止されたことから、地域の各団体が終結した連携会議の発足は出来なかつたが、定期的に地元区長と情報共有をはかり連携をとることができた。

- ・ 地元区長と連携がはかれていたことより、Tecoの活動やイベントの告知を記載したチラシ等を回覧板やポスティングで地域住民に幅広くお知らせすることができた。その為、参加住民が固定化されることなく多くの被災者に交流の機会を提供することができ、支援漏れを防ぐことができた。
- ・ なお、当初計画では、地元区と協働し、一人暮らしの高齢者など地域での見守りが必要な方を住民同士でサポートする「あんしん見守り隊」を平塙地区で立ち上げることを予定していた。しかし、コロナ禍のため、地元区での活動も制約を受けたことから、Tecoによる個別支援とすることとした。高齢独居などの方15人を対象にアウトリーチし、バレンタインや父の日など季節のイベントにあわせてこを行ったり、電話での状況確認を行った。
- ・ 当初から顔合わせや情報共有は行っていたものの、地元区長と話し合いながら活動していく中で、ハード面の対策を早急に行えるように活動している立場と、ソフト面で心の支援を継続して行いたい私たちとで、実際に見ている方向が異なると感じた時もあった。しかし、打合せを重ねるうちに、補い合いながら事業を進めていく形を学び、双方が歩み寄るかたちで良い関係性を築くことができた。
今後、災害支援を行う際には、地域の理解がとても重要ということを踏まえた上で、丁寧に挨拶まわりや事業の説明をしてから活動を始動していくべきだと強く感じた。

〈団体連携〉

- ・ 発災直後から約30団体が参加し月に1度開催されている「いわき市支援者情報共有会議」（いわき市地域振興課、いわき市社会福祉協議会、NPO法人ザ・ピープル、浜○カフェ、全国曹洞宗青年会、ピースポート災害支援センターの協同運営）にも毎回参画して、現地でのサロン活動を中心とした現状の共有を行った。
- ・ この情報共有会議をベースとして、東日本大震災と令和元年東日本台風の経験を活かし平時から団体間の情報共有を密にはかるべく令和3年2月23日に発足した「災害支援ネットワーク『WAK』」（参加団体数11団体）にも加わり、市内の中間支援組織の中心となるべく活動を継続している。
- ・ 情報共有会議でTecoの活動を周知できていた為に、水害被災地で心身が不安定になっていた住民さんについて、いわき社会福祉協議会が「てこてこサロン」に繋いでくださった。水害とコロナ禍で交流の機会を失い元気を失くしていたがサロンに通ううちに笑顔が増えて交流会等にも参加してくださるようになった。

- ・情報共有会議で互いの活動を共有できていた為に、NPO法人ピープルが行っているフードバンク事業と水害被災地の住民さんをお繋ぎすることができた。水害で職を失っていた期間があった為生活が不安定になり困窮していたが、定期的に食料を届けることができた。
- ・情報共有会議を通じては月に1度、定期的に情報共有することはできたが、コロナ禍でオンラインでの開催ということもあり、お互いの今後の活動等が見えない部分があった。もし、早い段階で直接会って対話を重ねていたら、各々のやろうとしていることが更に明確になりを連携の糸口が早く見えたと思うことがあった。オンラインでの情報共有会議で活動を共有しているだけでは発展は中々見られないと予想される為、今後はまず対話をすることを意識していきたい。

5) 住民への情報提供

- ・イベントごとにサロンの看板にチラシを掲示した。
- ・月に1度程度「てこてこ通信」を作成し、回覧板やポスティングでサロン情報等を地域住民に発信。延べ14回発行。1回あたり約500部を発行した（添付のとおり）。
- ・活動状況は、ホームページやFacebook、Instagramで随時発信した。また、事業期間中に発生した大雨や地震などの際に、Facebookを通じて速やかな安全確保を呼びかけたり、行政による土壌の配布情報を提供するなどした。
- ・「いわき民報」や「タウンメディア」、「読売新聞」「福島民報新聞」「福島民友新聞」「福島テレビ」など、地域に根差した新聞やフリーペーパーにも多くサロンの活動と等を取り上げていただき、様々な角度から情報提供をはかった。掲載回数は延べ31回にわたり、イベントの開催やTecoの活動を発信した。コロナ平癒を祈るシンボル「あまびえ」についての報道では、記事を見た方がTecoの支援活動を知り、新たにサロンを訪れるといったつながりを生むことができた。
- ・さらに、発災直後から1年6ヶ月の間、被災者に寄り添って、心身のストレスの状況と改善をサポートしてきた経験から、別紙「災害復興に至るまでの被災者の状況と必要な支援」をまとめ、活動を通じて得られた知見としてFacebook及びホームページを通じて発信した（添付のとおり）。
- ・想像していた以上に、幅広い形で発信し続けることが大切と感じた。日頃から交流がある目の前の住民さんに直接情報を届け、クチコミで広がっていくことも大事だが、継続して支

援活動を行っていく中で、中々声が届いていなかった被災者に、新聞やテレビなどのメディアを通じて情報を発信したことがとても大きかった。

何度も新聞の記事になることで、1回では行動に繋がらなくても複数回目にしてサロンに来る後押しになることが多くあった。特にいわき市内の情報のみを発信し続ける「いわき民報」の読者はとても多く、信頼度も高いことから、他のNPO団体等にも活動を知つてもらい繋がることがあった。また、新聞記者も、コロナ禍の記事で紙面が埋め尽くされる中、歩みをとめない地域に根差した活動に共感してくださったことで、双方にとってよい結果となつた。職業は違えど、熱い想いを持っているからこそ共感して共鳴していった。

(4)-2 評価小項目ごとの評価結果

- 評価計画に定めた評価小項目は以下の⑤～⑦である。評価結果は次のとおり。

評価項目	評価小項目	判断基準		評価結果、考察
		判断方法(指標等)	判断基準値(目標値/状態等)	
⑤実施状況の適切性	計画を具体化しスケジュールに沿って実施できているか	事業スケジュール 進捗報告書 事業実施報告書	ワークショップ参加者の合意	・月2回(最後は月1回)、RCFとの定例打合せの中で、事業の5つの柱に沿って繰り返し振り返ることで、事業を計画的に進めることができた。
⑥知見の共有、活動の改善	取組により得られた知見を情報発信しているか	ホームページでの発信	事業を通じて得られた知見をまとめ発信している	・ホームページやFBで日々の活動を発信し続けたほか、1年半の取組みを「被災者の状況と必要な支援」としてまとめてホームページ・FBで発信した
⑦組織基盤の強化	団体運営の基本規定や運用体制などを構築できているか	ガバナンス・コンプライアンスに関する規程の整備	事業期間中に整備すべき規定がすべて整備されている	・事業期間中に規定整備を行つた。休眠事業で求められることは対応できた。

(4)-3 事業実施における成功要因と課題

- ・成功要因としては、団体の理念と、申請時に定めた長期アウトカムから一切ブレることなく、目の前の住民さんに寄り添い、いま本当に必要な支援行うことを続けてきたということだと思っている。
- ・加えて、RCFの伴走支援があったことはとても大きい。現場に夢中になって毎日の支援活動を行う中で、定期的に打ち合わせる機会を設け、今後やるべきことを整理し、定量的な指標も意識しながら事業を進めることができた。
- ・今後の課題として、一定の成果を出し次の事業化にも繋がったが、被災地支援をする中で気づいたことを含めて、もっと継続的に平窪ができるような事業設計ができれば尚よかったです。

(5)「アウトカムの分析」に関する評価

(5)-1 各短期アウトカムの達成状況

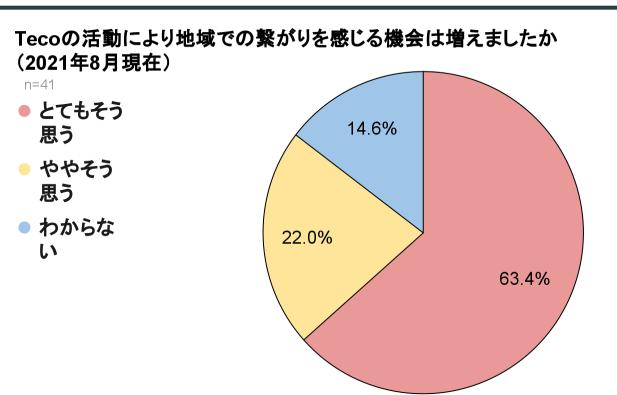
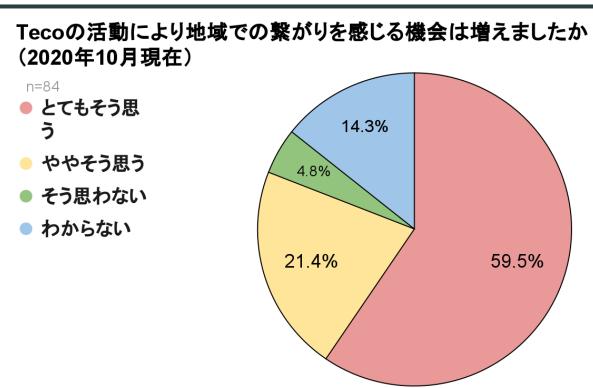
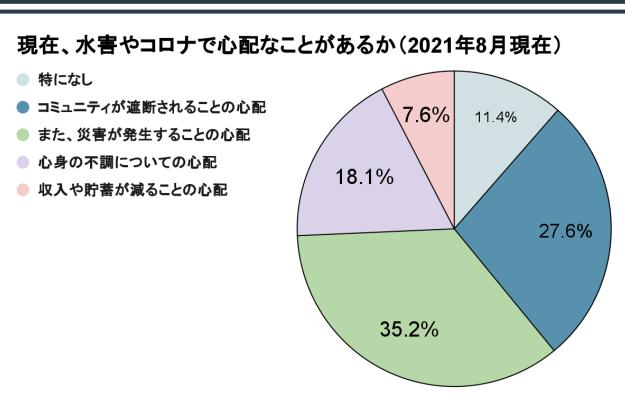
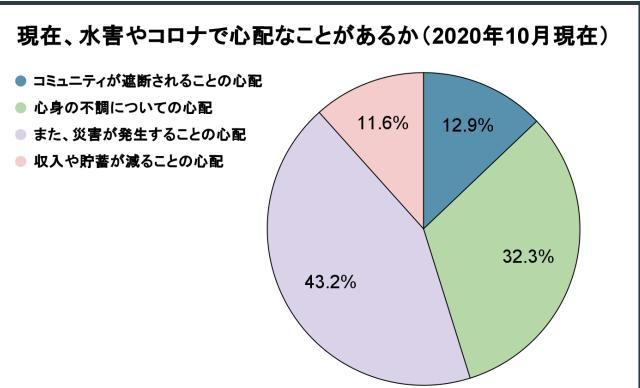
【設定した短期アウトカム】

いわき市平窪地区におけるコミュニティスペースを拠点に、被災者の精神的・肉体的ストレスを改善するための取組を行い、被災者が必要としている支援や情報を届けている。

- ・当初計画では、100名に対し支援を届けることを予定していたところ、事業終了時には184人に登録いただくことができた。
- ・この中で、被災者の精神的・肉体的ストレスの軽減についても着実に改善できた。サロンを訪れている方からは、「話を聞いてもらったり、自分の居場所ができ皆さんとの交流で心身のストレスが減った」という声が多く聞かれている。代表的な事例として、以下が挙げられる。
 - 社協（情報共有会議の参加者とは別）から問合せがあり、平窪在住の方が人との出会いがなく、体調も崩し、水害やコロナで不安を抱えているとのことで、てくてこに行ってみることを勧めてくれた。次の日から計20回以上、週2回は来ててくれており、「水害後、誰とも話せなかつた、きっかけもないし、友達とも誰とも会わない。ストレス性で頭痛などの体調不良もあつたが、こうして話せる場があつてよかつた、心が軽くなった」と言ってくださいました。体操の日やイベントにも積極的に参

加するようになり、今では笑顔を取り戻した。サロンがなくなることをとても残念がっていたが、今月から下平窪公民館で新たに始まったヨガサークルに参加するようになり、新たなコミュニティにも属しながら前向きに日々を送っている

- 水害で氾濫した夏井川の堤防の目の前にお住まいの高齢のご夫婦は、家屋の修繕の為に平窪から20分以上離れた市営住宅に避難し、長い間避難生活を送っていた。当初、お父さんは家屋の修復具合が気になって仕方ないため、毎日のように自宅に戻り家の様子を観察していた。その際、お母さんは毎回、自宅から自転車でてくてこサロンに来てくださり、「環境の変化で気が滅入ってしまいそうだけど、話し相手になってくれて良かった」とひと息ついていた。その後、ばたりと来なくなってしまった心配で連絡するとお母さんが体調を崩されて入院したこと。その後も定期的に連絡を取り、自宅の修繕が終わり、退院してからは、定期的に個別訪問を重ねていった。サロンに集まった物資を配布する度、「水害から時間が経っても、こうして私達を気にかけてくれていることが嬉しい」と何度も言ってくださった。サロン活動を終える事をお伝えに行った際もたくさん感謝の言葉をかけてくださいました。今月に入り、平窪地区のスーパーでお会いした際にお話したが、精神的ストレスは当時より大きく軽減し体調も回復しており、夫婦が寄り添って平窪地区で暮らしていくことのサポートが出来たと感じた。
- ・ 中間時点の2020年10月と事業終了時の2021年8月に実施したアンケートにて、災害発生時からの心の変化について調査を行なった。結果の概要は以下のとおりである。
 - 回答者数：2020年10月 91人、2021年8月 56人
 - 「水害やコロナで心配なことがあるか」という質問に対し、「心身の不調」については約36%減少、「また災害が発生することの心配」については約18%減少した。なお、コロナ禍も合わさったことで、コミュニティが遮断されることが心配という声は多く上がっている。
 - 「Tecoの活動により地域との繋がりを感じる機会が増えたか」という質問に対し「とてもそう思う」「ややそう思う」と答えた方が全体の85%に達した。
 - 「水害やコロナで心配なことがあるか」という質問に対し、「心配事は特がない」という回答は、中間アンケートではいなかつたが、最終アンケートでは12人見られ、私達の活動で不安が軽減され安心感を抱くことができた人が数多く生まれた。



(5)-2 評価小項目ごとの評価結果

- 評価計画に定めた評価小項目は以下の⑧～⑩である。評価結果は次のとおり。

評価項目	評価小項目	判断基準		評価結果、考察
		判断方法(指標等)	判断基準値(目標値/状態等)	
	⑧アウトカムの達成度	いわき市平窪地区におけるコミュニティスペースを拠点に、被災者の精神的・肉体的ストレスを改善するための取組を行い、被災者が必要としている支援や情報を届けているか	100名程度が支援を受けている	<ul style="list-style-type: none"> 上記のとおりサロン利用登録が184人となり、定性的にも不安が軽減されたり、体調が回復したり、当初より笑顔が増えるなどの変化が確認された。 住民アンケートでも、「Tecoの活動により地域との繋がりを感じる機会が増えたか」という質問に対し「とてもそう思う」と答えた方が、事業完了時点の中間時点よりも約21%増加した。
	⑨波及効果	取組やアウトカムを広く情報発信しているか	事業を通じて得られた知見をまとめ発信している	<ul style="list-style-type: none"> Tecoによる情報発信のみならず、メディアを通じた取組の発信により、あらたな利用者や団体とのつながりが生まれた
	⑩事業の効率性	費用対効果を意識した事業執行を行っているか	ワークショップ参加者の合意	<ul style="list-style-type: none"> 費用対効果を十分意識して効率的に事業を行うことができた。

(5)-3 成果に関する考察

- 受益者に対する成果

サロン等を通じて出合った人々が、皆、住民同士または当法人と繋がっている、そして今後も継続して繋がり合えるという感覚を抱くまでの、信頼関係とコミュニティを構築できた。

- ・事業関係者に対する成果

被災地域で継続して活動していく中で、常に関係団体等と情報共有をはかり、メディア等も活用し情報発信を継続して行ってきたことで、被災地の現状や当法人の活動を多くの関係者にリアルタイムでお伝えすることができた。そのことにより多くの支援に繋がるとともに、信頼関係を築くことができた。

- ・社会に対する成果

地元区や他団体と連携をはかりながら、被災者に寄り添ってきた活動により、コミュニティ支援の重要性や、社会課題の再確認と共に、地域コミュニティの可能性を発信できた。

4 . 持続可能性

(1)今後の取り組み

今後は、平窪地区に事務所を構え、何かあった時の個別対応を中心に、継続して支援していく。

その中で、多くの住民同士が繋がることができたコミュニティを今後も継続すべく、公民館等を活用しての体操教室や薬膳お茶会などは定期的に開催する予定である。

また、地域コミュニティの構築と防災意識も向上を目指し、地区と協働で「いわきまち未来創造支援事業補助金」を活用した防災まち歩きを今秋に開催予定である。

それに加え、平窪地区がどこよりも誰もが住みやすい地域にすべく、地元区や子ども会等とも連携をはかり、「総合型地域スポーツクラブ」の開設をめざしている。

(2)自己資金

(2)-1 契約当初集める予定だった総額 計0円

(2)-2 集められた自己資金の金額と種類 計428,000円

寄付金

- ・ 真如苑 328,000円
- ・ ひろしま避難者の会アスチカ 100,000円

(2)-3 資金調達で工夫した点

事業期間中に、今後も持続可能な支援体制の構築や、法人として自走できる仕組みができた
らと、以下の補助金に申請を行った。(いずれも不採択)

- ・ 日本財団
- ・ フェリシモ
- ・ 太陽生命
- ・ サントリー未来チャレンジ
- ・ ふくしま百年基金(一次)

今後は、行政資金や、寄付などの自己資金

- ・ いわきまち未来補助金(採択済)を活用して「防災まちあるき」を企画中
- ・ 活動の周知と共に寄付金を募り活動の幅を広げていく(年会費 法人10000円、個人3000円と設定)

5. 広報、外部との連携の実績

(1)メディア掲載 (TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等)

- ・ 別紙① メディア等掲載一覧

(2)広報制作物・報告書等

- ・ 別紙② てこてこ通信、てこてこ新聞、ちらし等まとめ
- ・ 別紙③ 知見のまとめ「災害復興に至るまでの被災者の状況と必要な支援」

(3)シンボルマークの活用と方法

- ・ 掲示や回覧、ポスティングするチラシ等にシンボルマークを掲載
- ・ HPに掲載

(4)シンポジウム、セミナーなどのイベントの開催等

- ・ 別紙④ サロン開催実績
- ・ 別紙⑤ イベント開催実績

6. 外部との連携の実績

(1)外部との連携の実績

- ・活動にあたり、以下の計18団体と協働して事業を行ってきた。今後の活動にあたっても、連携していくことが可能となった。

団体名	内容
いわき応援チームEN	サロンやイベント時のボランティアとして協力して頂いた。
NPO法人あそびだちLabo	急な環境の変化により、親も子もストレスを抱えた日々を送る中、親子の触れ合いの時間をつくれたらとキズナビクスを開催。
エクスプレッションDS	市内のダンススタジオから来ていただき、住民さんにストレッチや座ったままできる健康体操を教えてくださいました。 また、コロナ禍では自宅でできる体操の動画も依頼し作成。
公益財団法人 味の素ファンデーション	在宅避難等で栄養が偏った生活をしている被災者の方々に、バランスの摂れた温かい食事を提供できたらと料理教室を開催。
NPO法人ザ・ピープル	被災地住民の方で生活が困難になっていた方とピープルを繋ぎ、フードバンク支援を行う。
新潟の任意団体	水害直後から毎月、必要な物資(衣類、家電、日用品)を届けてくれた。
パルシステム	サロン活動や交流会で使用するお茶やお茶菓子などを提供。
ママcafeカモミール	水害からコロナの中、親子の不安や負担の解消ができたらと共催でお茶会を開催。
ママカフェカモミール/Npoはっぴーあいらんど☆ネットワーク	フードロスの観点からも活動している団体と連携をはかり、非常食等を大量にいただき、生活が困窮している被災者の方々に配布した。

TATAKIAGE Japan	てこてこサロンの活動の中で発足したママサークル「くぼっち」が、TATAKIAGEが運営するパークプラスというマルシェに参加し、生きがいの創出が出来た。
いわき社会福祉協議会	社協に連絡があった平窪地区の住民さんを紹介して頂きてこてこサロンと繋がった。
合同会社 はまから	通常のてこてこサロンやマルシェに出店。
白石ファーム	マルシェに参加していただき取り立て無農薬野菜を販売。
平消防署	協力していただき防災講話を開催。
いわき民報	数多く取材に来てくださいり、市内に活動を発信してくださった。
タウンメディアいわき	数多く取材に来てくださいり、市内に活動を発信してくださった。
いわき市地域振興課	情報共有会議等で情報共有を行い、今後、まちみらい補助金活用事業で連携して活動していく
チャコちゃん農園	住民さんを連れてブルーベリー狩り交流会を開催。また、農園のオーナーが英語教師であり、てこてこサロンにて、小中学生に勉強を教えてくださいました。

7 . 教訓・提言

(1)教訓・提言

- ・水害被災地の支援事業を行って来た中で感じたことは、人は「居場所がある」「コミュニティに属している」「話し相手がいる」という、一見些細なことが、生きる上で何よりも大切だということである。全てを失い過度の不安やストレスにより心身に不調があらわれてい

る方が、サロンに通う中で元気を取り戻す姿を数え切れぬ程見てきたことからも、今後起きる水害被災地において、最低限の衣食住を支援する対策と同じくして、被災地域に根差した交流サロンの開設は何よりも優先して行って欲しい。

・ また、水害等の災害で課題が起きるのではなく、災害をキッカケとしてもともと隠れていた課題がハッキリと明確になったのだとも強く感じた。昨今どの地域でも少子高齢化や共働き等によりコミュニティが希薄になっている現状で、日頃から見守り合えるしくみを作れるかどうかが、災害時の人命や心身の健康を守ることに繋がると考える。

そのことより、平時から誰もが気軽に集うことができる場づくりや、地域住民のエンパワーメントを引き出す催しなどを積極的に行うことが大切である。

・ 他団体や行政、メディアとの連携もとても重要である。1人ではできないことが、皆のチカラを合わせればいとも容易くできるように、それぞれの分野に長けている人や団体と繋がっていることが、モノゴトをスムーズに進めて行く重要なポイントである。

その為にも、常日頃から、自分たちはどんな目的で団体を立ち上げたか、どんな目的で生きているか、を常に明確にでき、それらを一番最小のコミュニティである家族や職場で共有できている状態を優先して欲しい。

自分が属するコミュニティで目的や想いを共有する感覚や術が身についている人は、それがどれだけ大きなコミュニティであっても同じように作りあげていくことが可能と私たちは考えている。

その他

■別添

- ・ 事前評価報告後に見直した事業計画（別紙⑥）やロジックモデル（別紙⑦）
- ・ 事後評価報告時の事業計画（別紙⑧）やロジックモデル
- ・ ガバナンス・コンプライアンス体制の整備・運用実績の確認リスト（別紙⑨）

■規程類の整備実績

(1)事業期間に整備が求められている規程類の整備は完了しましたか。 : 完了

(2)整備が完了した規程類を自団体のwebサイト上で広く一般公開していますか。：全て公開した

(3)変更があった規程類に関して資金分配団体に報告しましたか。：変更があり報告済